

友枝様

このまえは、おひさしるばりにおあいでき、
お元気なご様子、とてもうれしく、おもいました。
また、おみやげまでいただき、ありがとうございます。
いつもおころにとめていただきまして、
ころから、かみしゃ、いたしております。
さて、このあいだのお話しにありました
「かこのとり」についてしらべましたので、
おしらせいたします。
では、どうぞ、おからだにお気をつけて、
おすごしくくださいませ。また、おあいできる日を
たのしみに、ペンをおきます。

博子より

それから

「千ヨシマゲ」については、あとから、おたまりを
いたします

『かごのとりに』 1924年 (大正13年)

に、すまじい いきおいで はやりました。あまりにも
このうたが はやつたので、えいががいしゃが
きょうそうして、えいがをつくりました。

えいがにでてくる「かごのとりに」の 女の人 は
こいびとが あり 子 たら、きのすすま たい おやの
きめた おとこの人と けっこん させられました。そして
さいごに、女の人 は いわのう えから みを 上げ ぐ
しんだ そうです。このじだいの おとこの人と 女の人
のおつきあいの じゆうが おさえつけられた くるしみ
を あらわ しています。

『かごのとりに』

あいたさ みたさに こわさを わすれ
くらい まみちを ただひとり

あいききたのに せいで あゆぬ
いつも よぶこえ わすれたか

いつも よぶこえ わすれは せぬか
でるに であれぬ かごのとりに
かごのとりに ても じうある とりに
ひとめしの んで あいにくる

ひとめしの んで あいたいけれど
いや 子 うわさも たつものを

ひとの うわさを いと いわせぬか
かたし やぶれぬ かごのとりに。



友

枝

様

博

子

子

□□□-□□